

第一回震災復興ボランティア 活動記録

記録者：JTBコミュニケーションズ大阪 高井智世

■ 7月22日PM

仙台空港到着。JR仙台駅までバスで移動。出発後すぐに、洪水で骨組みだけが残された茶屋の廃屋を発見。その後の道中や街並みはきれいだが、路肩には時折瓦礫の山や傾いた家が見られる。

■ 7月23日

朝8時仙台駅集合。ここで初めてメンバーとの顔合わせになる。約1時間かけ、石巻市の水明町へ。

ここ水明町は静かな住宅街で、その時には既に町も綺麗に片付いていたが、当時には約1メートル程度の床上浸水があったのだという。よく見ると、塀や壁にうっすらとその痕跡がある。作業内容は、この水明町の住宅街の側溝のヘドロのかき出しである。各自用意されたスコップや土嚢袋を持ち、作業場へ。側溝の蓋を持ち上げ、ずらし、その場所のヘドロをスコップで男性がすくい出し、女性が構えた土嚢袋へ詰める。ある程度のスペースをかき出したら蓋を戻し、土嚢袋を随所にまとめて置く。単純作業のようだが力を使い、また悪臭の中での作業で集中力が落ちると危険を伴う。実際、男性一名は蓋を動かす際に指を挟み負傷、一日目で脱退となった。また土嚢袋を構える女性も、顔の間近でそれが行われるため、はねたヘドロが目の中に入ってしまったという例も耳にした。



この日、昼休憩ののち作業場へ戻るとき、震度4の地震があった。住民の方によると、4ヶ月たった今も、この程度の余震は頻繁に発生するのだという。その度に辛い記憶が蘇り、まだ続く恐怖との闘いがあるのだろうと痛感した。

この日、昼休憩ののち作業場へ戻るとき、震度4の地震があった。住民の方によると、4ヶ月たった今も、この程度の余震は頻繁に発生するのだという。その度に辛い記憶が蘇り、まだ続く恐怖との闘いがあるのだろうと痛感した。

宿泊先までの帰り途中で、特に津波の被害の大きかった海岸と住宅地を隔てる道（おそらく津波が襲う瞬間が繰り返しTVで流された）をバスで通ることになった。ある瞬間から、景色が一変した。瓦礫が散らばる地面の上には主に1階部分が流され、スカスカに残された建物がまばらに残り、ひと気はない。人に聞くと、このあたりはまだ危険が多く、手付かずのところも多く残っているのだという。必要性の高いホームセンターやドラッグストアなど、新しいお店も数件見られたが、そこだけ時間が止まってしまっているようで、復興と言うのは私が考えていた以上に難しく、時間がかかるものなのだろうと感じた。

■ 7月24日

作業場所、内容は昨日と同じ。日差しが昨日とうってかわって強く、じりじりと暑い日だった。ただ、二日目ということもあり、雰囲気は昨日より和やかで作業効率も上がっていた。真っ赤な顔をしながら、早くこの側溝に元の機能が戻るといいねという会話が多くなされた。飲み物や手洗い水を用意してくださる近隣の方も多かった。昨日より広い範囲を、決められた時間内で進めることが出来た。



■ 参加しての感想

私のような素人でも、ボランティア活動に参加出来る貴重な機会をいただいた。今回は先着30名、

という枠に幸いにもおさまったのだが、洩れてしまった方の中には、私よりも力があり役に立たれたろう方も多くいらっしゃったと思う。それでも今回見たことを伝え、経験を活かし、私なりに参加させていただいた責任を果たしていきたいと思う。

■参加後の現在

私を含め、関西（以遠）からの参加は少数派であったが、今でもフェイスブックなどで何名かのメンバーの方とつながり続けている。特に東北の方々は、その情報発信を積極的に行って下さっている。グループ会社同士としての交流の場をいただけたことも、非常に有難く、またいつか再会の機会があればと思う。